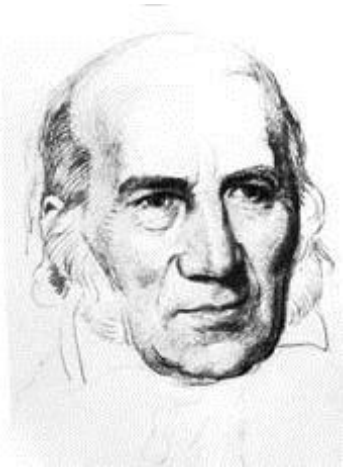
FSCN Discussion paper（社会文化形成ディスカッション・ペーパー）、No.15-1
2015年7月31日発行

グルントヴィのホイスコーレ構想が拓いたもの
――知的改革と政治・「社会」形成

小池　直人



スコーゴー（Peter Christian Skovgaard, 1817-75）
による肖像画（一八四七年）

名古屋大学社会文化形成研究会（FSCN）
（The Association for the Studies in Formation of Society and Culture, Nagoya University）
連絡先：名古屋大学大学院情報科学研究科　情報創造論小池研究室
Tel：052-789-4840；E-mail：nakoike@is.nagoya-u.ac.jp

概要：

この解説は、デンマークの思想家N・F・S・グルントヴィのホイスコーレにかんする諸論考の日本語訳に宛てたものである。日本にグルントヴィが農民の思想家として紹介されて以来およそ百年になるが、彼の思想が日本の文化に浸透している状況はない。だが近年、ホイスコーレをはじめとしたオルタナティヴィ教育の思想家として改めて注目されるようになり、かつてとは次元を異にして私たちはグルントヴィと出会っている。ここで私は、彼の世俗思想を知の改革、国民形成、政治哲学、社会形成に焦点を当てて概説し、それが日本における小国主義の思想とリンクすることを主張する。

グルントヴィは、聖職者であり神学者であるが、宗教的信仰と区別された世俗知の領域を承認し、その知を「直観」として表明した。その「直観」をもとに、グルントヴィは普遍的言語や記号に基づく近代の合理的啓蒙および分析的科学を、単独では生命のないものとして批判し、有機的な直観知の世界に埋め込もうとした。この知的態度がいわゆる「啓蒙の弁証法」を先取りする「生の啓蒙」であり、彼の構想したホイスコーレの知的基礎であった。この啓蒙の知は制度としてのフォルケリ・ホイスコーレを基点として「共通の最善」の理念にもとづいて知の偏在や分裂を架橋し、母語に基づいて参加者を政治的市民へと陶冶形成（ダンネルセ）することをめざす。この知的基盤は最終目標としては普遍的人間性を理念とするが、直接的にはむしろ知の授受を「生けることばによる」言語的相互行為によって共同化し、知と心（ハート）を架橋する国民主体の形成を促し、そのための政治哲学であろうとする。グルントヴィは必ずしも代議制度を支持せず、むしろ王権と世論との結合に要約される「世論に統治される絶対王政」に心を寄せたが、この点が同時代をリードする教養市民層の「国民自由主義」に対抗する農民層を背景とした民衆自由主義者の主張として提起される。

ここにかたどられた「民衆」、「国民」の思想はかたちを変えながら、後に産業化のなかでの「社会（サムフンズ）」形成、福祉国家形成に連続し、デンマークの社会経済や社会民主主義、労働運動にも浸透し、戦後発達する協議経済、協議社会の指導原理となり、近年の新福祉国家への転換や競争国家形成にもインスピレーションを与えている。

しかし、私は日本の思想的コンテクストにかかわって、グルントヴィを小国主義の思想家と意義づけ、とくに内村鑑三の「デンマルク国の話」の結論を参照しながら、「3．11」以後の日本が依拠すべき思想に示唆を与えることを主張する。

グルントヴィのホイスコーレ構想が拓いたもの
――知的改革と政治・「社会」形成

はじめに

グルントヴィはデンマークの社会・国家形成について語り、論議を組織する上で必須となる伝説的人物である（Hall et al. 2015）。もちろん彼への関心は現代日本では萌芽的であり、その研究は緒についたばかりである。しかし、彼の名が最初に紹介されたのはおよそ百年前に遡り、愛知県の安城周辺地域に象徴される豊かな農村づくり、いわゆる「日本デンマーク運動」においてであった（岡田 1992）。現在、このような視点からの研究関心がないわけではないが、遠い過去の民話にように聞こえる。じっさい、およそ七〇年後の「再発見」において、グルントヴィはもはや農村文化の思想家ではなく、近代日本を支配する「死の学校」「死せる教育」にたいするオルタナティヴの提起者であり、脱原発、再生可能エネルギー開発のインスピレーションの提供者であった（コースゴー他 1993; 江口 2010）。訳者もまたこうした関心に刺激を受け、それをさらに展開しようと考えている。

もっとも私は、グルントヴィがデンマークで何より自由の思想家とされることを知っている。だが、この視点も現代日本では無媒介には議論しにくいと感じている。彼が改革しようとしたルター派国家教会という宗教的制度の前提がないこともある。しかしそれ以上に、自由主義思想はすでに日本には他の欧米諸国から多様な仕方で導入され、昨今の新自由主義の台頭と格差・貧困化社会の趨勢に有効に対処できずに、その信頼性が傷つけられており、再出発が必要である。私にかんしていえば、現代日本がグルントヴィから有益なメッセージを受け取れるとすれば社会的自由主義、あるいは社会的ヒューマニズムになると考える。このことは説明を要するが、ここでは立ち入らず、むしろその視点を前提に解説を進めたいと思う。

ところで、私がデンマークやグルントヴィ研究に携わるようになった背景には、一九九〇年代のいわゆる介護保険制度論議があった。当時「寝たきり老人のいない国」（大熊 1991）といったことばで公的社会保障の整備されたデンマークへの関心が表現され、社会科学研究者のあいだでは「福祉国家レジーム」論の活況があった。それらのことが刺激となって訳者もはじめてデンマークを訪問したと記憶している。

とはいえ、その関心は私のなかでしだいに近代発展の思想へと変化し、デンマーク型社会発展とグルントヴィとの関係を追究するようになった。この点は別途に書いたので（小池 2010）、ここで詳しく辿らない。だが、今から考えるとその関心の持続的に後押ししたのは、私が最初に留学した研究機関での共通関心、「協議経済」の理論であったと思える（Pedersen 1993; Pedersen et al. 1994）。それ以来私は、現代デンマーク社会を制度史から辿るとともに、その思想をグルントヴィのテクストから説明しようという構想のもとで牛の歩みの研究を続け、『グルントヴィ哲学・教育・学芸論集』に集成した諸論考を和訳し、刊行してきた。

そして、二〇一一年三月一一日に東日本大震災とフクシマの原発事故が襲った。この「三・一一」はじっさい、日本の近代発展の根底的問いなおしを提起し、その後の政治反動によっても消

し去ることのできないテーマを私たちに突きつけている。それ以降、グルントヴィと近代デンマークからどんな示唆を受け取れるのか、私にとってはいっそう切実な研究テーマとなった。この解説はその意味で私の初期的報告であり、今後の研究への指針である。

本題に入ろう。ここで私が読者に紹介するN・F・S・グルントヴィは一九、二〇世紀には北欧を除いてごくわずかな人々に知られていただけだったが、近年、世界各地でその名が客光を浴びるようになってきた。それは彼が「世界一の仕合わせな国デンマーク」の精神的背骨となり、リベラルな価値と社会的連帯とを結合する哲学によって、国家、国民、社会の形成過程に左右の政治イデオロギーを問わずユニークで決定的な影響を与えてきたという事情による（Pedersen 2010; Korsgaard 2012; Hall et al. 2015）。じっさい彼は、一九世紀デンマークではリベラルな農民思想家、ホイスコーレの構想者として知られ、二〇世紀への転換期から第二次大戦にかけて国民思想家に変貌し、コンセンサス型民主主義や社会経済の創出、福祉国家形成にも価値的基礎を提供し、第二次大戦時のナチ占領下にあってはデンマークの対独独立の精神的結集点にもなった。

それらにとどまらず、グルントヴィの名声は開発途上国でも生活世界に起点をおいた内発型社会開発の思想家として知られるようになり、「グルントヴィ・プログラム」はヨーロッパで成人教育の代名詞として認知されている。そして今ではグルーバル化した国際環境のもとでの維持可能な知識基盤型社会の思想的創始者とされ、また国民的競争、制度的競争といった視座を提示した点でも評価がなされはじめている。死後すでに一四〇年余を経過するが、「グルントヴィ」は近代デンマークの伝説的思想家として、今日でも盛んに多くの政治家の発言のなかで引用されている(一)。だが、私自身は彼がデンマークを越えてさらに人類的思想家として評価可能という予感をもっている。そのことを簡潔に小国主義というキーワードで要約したいと考えるのだが、拙訳『グルントヴィ哲学・教育・学芸論集』が日本でのそうした議論の呼び水になればと思う。

いずれにしても今、グルントヴィ研究の活況があることは疑いない。管見のかぎりでもデンマーク内外で優れた研究が次々と刊行され、グルントヴィ像を現代的に刷新している。くわえてK・E・ブッゲらの編集による独訳テクスト集『N・F・S・グルントヴィ選集』（*N. F. S. Grundtvig: Schriften in Auswahl,* hrg. von K. E. Bugge et al., 2010）や、E・ブロードブリッジらの編集による英訳テクスト集『生のための学校――グルントヴィの民衆教育観』（*The School for Life: N. F. S. Grundtvig on Education for the People,* ed. by E. Broadbridge et al., 2011）など、翻訳類の刊行も相次いでいる。繰り返しになるが、時代は一九世紀ヨーロッパの辺境に生きたグルントヴィを遅まきながら人類的視野をもった思想家に仕立てようとしている。幸運にも歴史の偶然の巡り合わせによって、私もその輪のなかに加わろうとしている。

とはいえ、依然として日本では「グルントヴィって誰、どこの人」と問われる状況にある。より正確にいえば、昭和初期の農業恐慌以後、東海大学など一部の学術サークルで語り継がれたものの、二〇世紀末にフォルケホイスコーレへの関心によって彼が「再発見」されてもなお、その知名度は回復していない。フォルケホイスコーレは二〇一二年段階で、デンマークで七五校ほどが活動しているとされ（AFHD 2012）、日本でも徐々に知られつつあるが、その社会的、政治的意味について議論はまだ皆無といえる。そこには地理的距離や言語および宗教の相違、テクストの難解さ、未知の思想的系譜など、数えればきりがないほどの障壁がある。研究が初期的であることから、この解説も十分に委曲を尽くしたものとはなりえない。とはいえ私は『ホイスコーレ』上下巻の刊行を機会に少し大風呂敷を広げ、脳裏にある関心をあまり細部にこだわらずに表現することにしたい。

とくにここで焦点を当てるのは、順に知の改革、政治哲学、政治的影響、「社会」の構築といった一連のテーマになる。そして最後に、とくに日本との関係でそれらのテーマを小国思想と解して簡単にコメントをくわえ、小論を閉じることにしたい。

一　知の改革としての「生の啓蒙」

既述のように、グルントヴィは一方で世俗的諸事象を論じた思想家であったが、他方で元来は神学者でありデンマーク国民教会の聖職者であった。後者にかかわって論議の深みを紹介する準備は私にはほとんどない。だが、明白なことは彼が「信仰」(Tro)と、世俗的諸事象を知的にとらえる「直観」(Anskuelse)とを区別し、後者をたんにキリスト者だけでなく、「自然主義者」や「異教徒」にも開かれ、接近可能なものとしたことである。それは、「モーゼ・キリスト的直観」(mosaisk-kristelig Anskuelse)とも、「歴史・詩的直観」(historisk-poetisk Anskuelse)ともされるが(グルントヴィ 2012)、この直観知が、「フォルケリ・ホイスコーレ(二)」(folkelig Højskole)の基礎を支え、「生の啓蒙」(Livs-Oplysning)とされる改革知の母体となる。現代日本のグルントヴィへの関心もおおかたそこに収斂しているので、私はまず、この知の形式を近代思想史の系譜の上に位置づけるよう試みたい(三)。

さて、ヨーロッパに端緒をもつ近代思想は、しばしば一七世紀のデカルト哲学を引き合いに出して論じられる。なぜならデカルトは「我思う、ゆえに我あり」(『方法序説』)として近代的自我の哲学を本格的に立ち上げ、知の確実性の基準を明晰判明に思考する人間理性に求め、ここに強固な人間的主観の原理を打ち出したからである。この主観原理を私は人間理性の原理と呼ぶとするが、それは強力な思考様式の変革力によって合理主義思想の潮流をかたちづくり、その後グローバルに波及した。この潮流は数学的自然科学者らの力強い支持を得て一七世紀末には古代の古典的学芸を凌駕したとされ、一八世紀にいわゆる啓蒙の時代を開花させる。この啓蒙は人間理性の光によって暗がりを照らすことで得られた知見を拡大普及することとされるが、大まかにいって、イギリスに発達した経験論型と大陸ヨーロッパの演繹論型とに区分されている。とはいえ、それらは総じて主観的な人間理性を知の核とし、フランス革命に象徴される市民革命に猛威を振るい、今日にいたるまで非合理な独裁体制を解体し、変革し続けている。政治革命、経済革命という表現との比較でいえば、それはまさしく連続的、過程的な理性的思考の革命、あるいは哲学革命といえるのである。

この人間理性のプロセスは「啓蒙」という表現にかかわって、しばしばドイツの哲学者カントの有名なテーゼを参照させる。すなわち、啓蒙とは、人間が自己の未成熟の状態から抜け出すことであり、「自分自身の知性を自ら使用する勇気をもつ」という自律への覚醒である(『啓蒙とは何か』)。この啓蒙はフランス革命を背景に、また教会に代替する知的制度としての学校と、そこで開発される知的慣習を媒介に、今日のいわゆる知識社会を創出して行く。この知的伝統の豊穣さは認知的にも実践的にも自明であり、その全面的な否定はもはや不可能と思えるが、しかし、二一世紀の現時点からすると、同時に、そこにはらまれる毒性、すなわち様々なリスクや抑圧の深刻さもしだいに認識されつつある。これが思想史上では「啓蒙の弁証法」の概念で把握される事態である(四)。とくに近代科学にかんしていえば、一九四五年の「ヒロシマ・ナガサキ」、二〇一一年の「フクシマ」を経験した私たちにとって、理性の非理性への反転の弁証法は理解しやすい。じつにグルントヴィは一方でこうした主観的理性の原理の意義を承認しながらも、他方でそれ以上に、そこにはらまれる諸問題をすでに一九世紀の段階で洞察、告発しており、この原理の毒素の抗体を含

んだ知の形式を「生の啓蒙」として掲げ、その制度である「フォルケリ・ホイスコーレ」を拠点としてオルタナティヴ近代の径路を照らし出そうとした。換言すれば、グルントヴィは人間理性の原理に内在する毒素を篩にかけ、主観的理性を社会生活に有機化して埋め込もうと努めた。そこに結晶した作品が現代デンマーク社会だと私は想定しているのである。

ちなみに、この人間理性の「毒素」という問題性にかかわって、その原子論的発想や合理的画一性に反発して感情、個性、生、全体的調和などを掲げて対抗したロマン主義は当然の参照点となる。グルントヴィの思想史的系譜を考慮するなら、スピノザの「神即自然」といった汎神論の形而上学を一九世紀ドイツのコンテクストで体系化したシェリング哲学が、ノルウェー＝デンマーク出身の哲学者H・シュテフェンス（Henrik Steffens, 1773-1845）によるコペンハーゲンでの連続哲学講義（一八〇二、〇三年）で北欧に導入され、北欧ロマン主義を開花させていった経緯は決定的である。この連続講義は当時のデンマークにおいて、民衆の国歌を書いた詩人A・エーレンシュレアー（Adam Gottlob Oehlenschlæger, 1779-1850）や童話作家のH・C・アンデルセン（Hans Christian Andersen, 1805-75）、孤高の哲学者S・キルケゴール（Søren Aabye Kierkegaard, 1813-55）らを輩出したデンマーク文化の黄金期の精神的母体となった。もちろんグルントヴィもこの精神に連なり、じっさい彼自身、様々なテクストのなかでこの連続講義を思想的「事件」として意義づけ、彼の従兄弟であるシュテフェンスをホイスコーレの知的な産みの親と認めているのである（コック 2007; ダム 2014）。

とはいえ、グルントヴィはロマン主義をそのまま承認するわけではない。たとえば、その哲学的旗手であったシェリングは、精神と自然との「絶対的同一性」を哲学原理とし、それが天才的な知的直観においてのみ把握できるとし、その教育的普及はまったく無駄と宣言している（Scharling 1947）。これにたいしてグルントヴィは、ロマン主義的直観の原理的意義を承認しながらもシェリングとは正反対に、私たちが直観の分析と再統合の連続的過程を通じて、たとえ完全にではないとしても真理に接近できると考えている。直観は分析解明の歴史過程と結合され、ロマン主義は啓蒙主義と連結される。グルントヴィの「生の啓蒙」はこの直観知と分析知の媒介、相互作用にあって知の産出過程として成立するのである（小池 2009）。

じっさい彼は人間理性の原理に基づく啓蒙を「浅薄な啓蒙」、シャローな啓蒙とし、これを解毒して摂取しようとした。すなわち理性的知見の意味を有機的、社会的な生の連関にまで深め、そのなかに埋め込もうとした。これが彼の「いっそう根底的な啓蒙」（グルントヴィ 2011）、ラディカルでディープな「生の啓蒙」の立場である。このことの要点は、知の真理性、確実性が対象と個人の理性との経験的一致、あるいは理性による対象の構成に求められるはするが、それらを経た認知的関係に還元されるわけではなく、むしろその真理性は原理的には、通常の言語的相互作用を通じて諸個人の健全な「常識（コモン・センス）」（sund Menneske-Fornunft）のなかで合意を得てはじめて客観的・相互主観的に成立する、こうした表現が許されるなら、「下から」の民衆的国民的合意によって成立すると立論することである（Grundtvig 1905）。それゆえ、「常識」はたんに概念や数式によって把握され、「普遍言語」を通じて学術サークルの狭域で承認される知ではなく、それ以上に、多様な人々に理解できる「生けることば」で語られ、対話や討論、衝突や紛争を含む諸個人、諸集団、諸国民の歴史・社会的プロセスのなかで醸成される知の地平である。その過程で、「常識」は人類の知的共通資産として運動し、切磋琢磨を受けて深化し、その質を向上させる(五)。このことは知の社会化や歴史化というだけでなく、さらに知の民主化とも表現できる。それゆえ、グルントヴィの「生けることば」や「相互作用」といった基本諸概念は抽象的、思弁的に把握さ

れた「社会」や「コミュニティー」によってとらえられないことはもとより、バラバラに分断された、没政治的でトリビアルな生活知に限定されることなどけっしてありえない。それらの基本諸概念の背後には一方で伝統的（新）人文主義の権威主義秩序の民主化があること、同時に近代科学に象徴される人間理性の原理にも随伴する権威主義、例えば業績権威主義や過度の専門家崇拝とそれに基づく社会全般の階級的再編成への異議申し立てがあること、それゆえ端的に知の民衆化を同伴する一定の政治哲学であることを、私たちは理解しておかねばならないのである。

二　知・政治的資源の再配置と主体形成

本節は、これまで述べた知の改革「生の啓蒙」の特徴を三点、すなわち架橋の知、国民主体の形成、ホイスコーレ型知的慣習にかかわってふれる。順を追って述べよう。第一の架橋の知というのは、グルントヴィのめざす知がつねに何らか分断状態を橋渡しする過程だからである。たとえば、「フォルケリ・ホイスコーレ」構想にかかわるテクストで、しばしば「啓蒙と陶冶形成」（Oplysning og Dannelse）という表現が用いられる。この場合、グルントヴィの「生の啓蒙」もまた啓蒙として何らかの知識の普及、授受であるが、そこに不可欠な仕方で「陶冶形成（ダンネルセ）」が随伴することが核心となる。ここで彼は知識の授受による諸主体の成長、すなわち内実変化を問題にしている。つまり、一般に教会が信仰にかかわり、絶対者にたいする信頼と帰依を本質とするのにたいして、学校が扱う知は主観にかかわり、個人の覚醒に関与する。その意味で、とくに近代以降発達する学校は多かれ少なかれ個人化あるいは自我の覚醒のための制度である。しかし、グルントヴィが「陶冶形成（ダンネルセ）」という場合、この個人化は表層のレヴェルでの知の授受として、したがって因果論的な一方向の地の伝授として把握されるだけのものではない。授受が言語的な「相互作用」（Vexel-Virkning）のなかで行われ、個々人の個性やユニークさへの覚醒、アイデンティティーの獲得が同時にある種の人間的な、あるいはディースントな共同性において営まれる。成長とは相互作用、すなわち個人化と共同性への人間的発達・成熟の両者を含むのである。通常は共同性については家族や親族、地域、職域などの諸相が想定されるかもしれない。だが「フォルケリ・ホイスコーレ」の場合、「陶冶形成（ダンネルセ）」はそれらの諸相と区別された関係、アリストテレスが友愛（フィリア）と呼んだ質の関係に媒介される。すなわち「フォルケリ・ホイスコーレ」の活動は、自立と共同に基づく国民形成、あるいは市民形成と不可分なのである。

なお、デンマーク語の表現では「陶冶形成（ダンネルセ）」と区別された「教育（ウズダンネルセ）」（Uddannelse）ということばがあり、これは当人が外部から受け取る未知の専門的知識やスキルの授受、したがって主観の拡張にかかわる。この「教育（ウズダンネルセ）」だけを分離して学校の課題にすることを、私たちが当たり前のように考えるかもしれないが、それこそがグルントイヴィが「浅薄な啓蒙」、「シャローな啓蒙」とする知的慣習であり、個々人を差異化して分断するだけで、相互作用をもたらさず、それゆえ共同性や市民性を導くことがない。こうして私たちは、「フォルケリ・ホイスコーレ」構想が「相互作用」すなわち共同によって個人性への覚醒を民衆・国民と結合すること、換言すれば市民社会に生きる個人の形成を基本課題とすることを知っておかねばならない。「生の啓蒙」が架橋の知だというのはそうした意味でまずなにより、政治的意味を含む知の運動であり、個性と共同性とのベクトルを相互に異にする両要素を連結する過程だからなのである。

ただし、グルントヴィのいう「市民社会」は、「学者の共和国」といった仕方で自然やエスニックな要素から完全に分離した空中楼閣ではない。それはまた一二歳から一八歳までの少年の一部が

通った「未成年男子学校」でのように、ラテン語や数学、普遍的記号を知のメディアとするのでもない。むしろ「市民社会」は第一次的には土着言語、すなわち「生けることば」(det levende Ord)としての母語を用いることよって「民属・民衆性(フォルケリヘズ)」として、あるいは国民的共同性を境位として存立する。グルントヴィがラテン語学校や学術探求の学校と区別して「市民学校」とする「フォルケリ・ホイスコーレ」を、「デンマーク語ホイスコーレ」、「ノルウェー語ホイスコーレ」等と表現するのもこの論理によることなのである。

たしかに、母語としてのエスニックな言語を知のメディアとすることは、一方で相異なる言語を用いる諸国民を区別する。このことは制約的な事実である。しかし、同じ市民社会内部で知の分断を架橋して克服することも事実である。後者が国民形成の進められた一九世紀の中心課題なので、問題の焦点をここに当てるが、その意味にしたがう架橋の形式は多様であろう。それは基本的には精神と自然(身体)、理性と感情などの二元論的形式の架橋であり、ロゴスとパトス、学問と啓蒙、外来のものと土着的なもの、規範的思考と実感的思考、エリートと大衆、ロゴスとエロース、男と女、支配者と被支配者、中心と周縁、文明と野生等々の架橋と考えることができる(Korsgaard 2011)。グルントヴィがめざしたのはこのような分離の架橋、すなわち同一の共同性のなかでの知的資源の再配置(知的福祉)であり、ひいては政治的上部構造の再配置であった。だが、その論理を延長していって政治的解放は実現するかもしれないが、社会的格差などの多様な物質的不均等、不平等問題は依然として残存する。これにたいして社会主義思想や福祉国家制度は物質的格差・分断の克服を資源の再配置の基本問題とみなし、そこから上部構造における対立の克服をめざした。このことと対比していえば、グルントヴィの出発点は知的資源の再配置(知的福祉)、ひいては政治(資源)の再配置であり、より一般化して上部構造の再配置であって、そこには経済的土台への浸透という課題が残される。この問題は「グルントヴィ」と「マルクス」という二人の思想家の名で象徴的に表現できるかもしれないが、これは後に若干ふれることにする。いずれにしても、グルントヴィはあくまで知的・政治的資源の再配置という基本関心から出発して時代と格闘し、高等教育の再設計に取り組んだ。ホイスコーレ構想のテクストからすると、この再配置は「北欧の光」のもとでの「学問」と「啓蒙」の両者の制度化によるものであった。この点をさらに敷衍しよう。

まず前者の「学問」についていえば、私たちはここでグルントヴィの「学問的ホイスコーレ」(videnskabelig Højskole)、すなわちスウェーデンのヨーテボリに構想された「北欧大学」に注目しなければならない。彼は一方で「フォルケリ・ホイスコーレ」を「生のための学校」(Skolen for Livet)とし、そこに民属・民衆的、国民的な相互作用の圏域を想定するが、その場への参加者の大部分は一般庶民である農民であり、同時にそこに法律家や聖職者、教師、行政官等(の候補生たち)が、試験等のチェックを抜きにして同じ国民あるいは市民の資格で参加するとした。これにたいして「喜びの学校」(Skole for Lyst)といわれる。「学問的ホイスコーレ」は物理的学問と歴史的学問の二本柱で枠づけられ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの北欧三国の知的慣習を背景としながら「人間性」(Menneskelighed)の普遍史的解明がめざされた。そのさい北欧の学問的慣習は、分析知の支配と、その下での学問と人間性の荒廃状況を、それゆえ知的、精神的疎外を独自の直観知を導きの糸として克服することを使命とした。グルントヴィはこの知の基礎に宗教的信仰と区別された意味での「モーゼ・キリスト的直観」等々をすえ、そこにキリスト者であれ自然主義者であれ、異教徒であれ、文化的相違を横断する普遍性の次元が拓けることを指摘したのである(グルントヴィ 1912, 1914)。

とはいえ、ここで私は彼の学問論の詳細に立ち入ることを控える。要点として、グルントヴィの構想においてホイスコーレは市民的生の陶冶形成をめざす「フォルケリ・ホイスコーレ」と、人類の普遍史にかかわり世界と人間性とを学術的に解明する「学問的ホイスコーレ」とに区別されること、参加者も前者の市民であろうとする者、後者の学術探求を志望する者とに区別されること、そのさい法律家や官吏の育成が「学問的ホイスコーレ」の課題ではなく、むしろ「フォルケリ・ホイスコーレ」のそれだとされ、このことで、法曹や官吏は、王権や支配階級の下僕ではなく、優れて民衆的国民と連携する公僕と意義づけられること、「学問的ホイスコーレ」と「フォルケリ・ホイスコーレ」とは相互作用し、相互補完的であることなどを確認することでよしとしよう。

第二に、知的改革の目標である国民主体についてふれよう。クルントヴィは「生のための学校」のテクストの末尾で「奴隷なき民属・民衆」のスローガンを掲げ、官吏や学者、聖職者が公僕として「共通の最善」(det Fælles Bedste)あるいは「公共の福祉」に貢献しなければならないと強調しているが、このことは彼の知の改革が強く時代の転換を意識した政治哲学として打ち出されていることを意味する(Birkelund 2000, 2001a, 2008)。すなわちフランス革命以後の世界が絶対王政から代議政体への転換期にあり、とく一八三〇年のフランスの七月革命によって復古的ヴィーン体制が動揺するなかで、デンマーク連合王国内の四か所に身分制地方諮問議会が設立されたのだが、このことにたいしてグルントヴィは敏感に反応した。諮問議会は一八三五年からシェラン島のロスキレとユラン半島のヴィボーで活動を開始する。グルントヴィは公論に基づき「上から」改革を実行する絶対王政の擁護派であり、身分制諮問議会の可能性を懐疑し、時期尚早と考えていたのであるが、議会の活動は彼の心情を揺さぶり、議会懐疑派から肯定派へと変化することになる。彼は遅かれ早かれ民主化が到来する必然性を理解するようになり、一般「庶民」がその制度を担い、議会でも教養市民層に伍して討論できるよう、彼らの陶冶形成を焦眉の急として強く確信するようになる。すなわち、彼は代議制国家の形成と相対的に区別される国民主体の形成、あるいは市民の形成を時代の優先課題としたのであり、本書のテクストに見られるように、シェラン島の中央部にあるソーアの学術施設に「フォルケリ・ホイスコーレ」を付設するよう当時の国王クリスチャン八世に請願するのである。

ちなみに、「市民」や「民衆」と区別され、それらの主体の前提となるデンマーク語の「庶民(アルムエ)」(Almue)ということばには興味深いものがある。それは文字通りには「全体資産」あるいは「共同資産」であり、身分社会にあって下に投げ置かれた「サブジェクト」として受動的労働力であり、政治的臣民であった。しかし、「庶民」は実質的に小農民なのであるが、民主化を進展させ、その制度を良好に機能させるにはその「庶民」が近代的「サブジェクト」に、すなわち国家運営の主体としての「民衆的国民」ないし「市民」へと脱皮し、成長しなければならない。ソーアに構想された「フォルケリ・ホイスコーレ」はこの陶冶形成を担い、ひいては「共同資産」にたいして主体的、全面的な発達への道を開く施設と解することができる。それゆえ、「フォルケリ・ホイスコーレ」がめざす「庶民(アルムエ)」から「民衆」への成長、すなわち「フォルク」や「フォルケリ」、「フォルケリヘズ」といった主体形成は、グルントヴィの市民的、政治的プロジェクトを要約する。それは自由、平等、友愛を掲げたフランス革命の「国民」をデンマークのコンテクストにおいて的確な仕方で形成することであり、その射程はすでに国民国家、高度な民主的福祉国家、さらには「社会(サムフンズ)」を担う主体にまで及んでいたというべきである。

第三の注目点は、「フォルケリ・ホイスコーレ」の知的慣習についてである。すでに述べたが、ホイスコーレは「死の学校」を代替する「生のための学校」といわれる。この場合「死」(Død)には、テ

クストが繰り返し述べるようにラテン語に代表される非日常言語の習得と古典文献に基づく人文主義的教育が念頭に置かれる。それは綴りや文法、成句を暗記して試験に備えるといった機械的学習を常套手段とし、学校をメカニカルな規律・訓練の場にする。そのさい、個人のアイデンティティー獲得や社会化は非本質的であり、結果的にメリトクラシーの論理による垂直的社会的序列の新たな生産が本質的要素となる。グルントヴィは、こうした事態にたいして「フォルケリ・ホイスコーレ」構想で「生けることば」による「相互作用」すなわち共同化を掲げ、学校がたんに私たちの知性を刺激し機能させるだけではなく、同時に魂や心（ハート）をも揺さぶって解放し、冷静な知性と暖かい心情の両者を備えた豊かな人間を育成することを展望した。歌謡や物語、神話などの題材がそのことを力強く支えたのである。

そこで紹介しておきたいのだが、そもそもグルントヴィにとって「生」（Liv）は理性以上のものであり、感覚作用、想像作用は知性を内に含むものである。生の「経験」（Erfahring）はたんに認識論的な意味での「経験」「実証」に尽きるわけではなく、むしろ後者は個人の生、社会的生、人類の生を包括する歴史的経験の存在なかに包摂され、位置づけられることになる。こうしてグルントヴィの「生の啓蒙」は冷徹な主観的理性の光に象徴されるのではなく、むしろ暖かく人間性を全体として解放する太陽の光の比喩に依拠する。じっさいマリエリュスト・ホイスコーレの開校によせた彼の詩は象徴的にこのことを詠っている（グルントヴィ 2015）。

太陽が春の季節に輝くように
それが夏の日々を暖めるように
真の啓蒙はいつも温暖で優しい
だから我等の心は寛げるにちがいない
　闇の脅威にもかかわらず
　光線の腕に抱かれれば
　光と暖かさによって
　心は歓喜する

ここで啓蒙と人間形成の制度である学校は「陽光」に照らして世界の闇を照らすとともに、心を歓喜させる。啓蒙は「頭」と「心（ハート）」、「精神」と「塵（身体）」を架橋するケアや癒しの次元を同時に拓いた。ホイスコーレは、哲学者K・E・レーストルップ（Knud Ejler Løgstrup, 1905-1981）のことばを借りれば「至高の生の諸表出」、つまり生の勇気、喜び、信頼、暖かさ、希望などの諸価値の表出の場であり（Birkelund 2001b）、メカニカルな主体を自然で人間的な共同主体へと再生させる場だったのである。

このような知の慣習や学校のイメージは、精神的自由のエートスが失われ、新自由主義的な競争至上主義と強権的国家コントロールに支配された現在の日本では想像することが困難になっている。学校は序列創出型に設計され、過剰な機械的「教育（ウズダンネルセ）」の装置となって「陶冶形成（ダンネルセ）」の余地を奪う傾向にあり、そこに人間疎外と社会の退嬰からの回復の機能が発揮できているとはいいがたい。今この問題に立ち入る余地はないが、この事態は「生の啓蒙」を知の慣習とするようになったデンマーク型近代と、そのことを合理化の名のもとに切り捨ててきた日本型近代とのあいだで、学校のコンセプトに大きな隔たりが生じたことを証言している。第二次大戦の直後に日本型近代に亀裂が生じ、その隙間からデンマーク型の「太陽」が覗いたことは想

像できる（小池 2005a）。だが、その後は戦前とは別形態のメカニカルで「死せる学校」が再現されている。それでも私は「フォルケリ・ホイスコーレ」が一九世紀デンマークを支配した「死せる学校」に対抗し、知的慣習の改革を学校一般に押し広げたように、日本でも生の喜びや民主的市民の覚醒と不可分に結合した知やスキルの獲得が完全に遮断されたわけではないと考えており、現在および将来、多様な改革の試みが叢生することを期し、基礎準備に寄与したいと願っている。

三　「共通の最善」とその具体化

こうして、元来は聖職者であり、詩人、讃美歌作家として知られるグルントヴィではあるが、私は彼をまずは知の改革者、しかも政治的性格を帯びたそれと受け取ってきた。このことと関係するが、近年、グルントヴィを神学者あるいは宗教家とする以上に、世俗思想家であり独自の政治哲学者とする視点からの研究が活発化しており、私もまたこの傾向に棹さすことになる。

ちなみに、グルントヴィと政治との関係で私は以前、H・コック（Hal Koch, 1904-63）の『グルントヴィ』（コック 2007）を邦訳し、そのさいに、第二次大戦時のドイツの占領下にあってグルントヴィがデンマーク独立のための国民的結集点であったことを紹介した（小池 2007）。すなわち、すでに一九世紀の段階で、デンマークとドイツの緊張がとくにスレースヴィ・ホルシュタイン地域をめぐって高まり、二度の戦争に発展したのだが、その雰囲気は本書の「デンマークの祝賀」などのテクストからもうかがえることである。そのなかでグルントヴィ自身は自国の独立の権利を主張し、一八四四年のスカムリンの丘での集会においてナショナリズムの高揚に一役を買うことになる。だが、他方で彼は他の諸国民の独立の権利を同等に承認しており、領土拡張主義や帝国主義的言辞をいっさい弄していない。この点に私たちは彼の小国主義を見ることができるのである。

焦点を防衛問題にすえれば、グルントヴィは「いわゆる『一般的兵役義務』に反対するデンマーク王国議会での演説」（一八四八年）によって、国家武装や徴兵制を民衆抑圧的なものとみなし、むしろ祖国防衛を自発的な民衆あるいは国民の心（ハート）に依拠するものと表明していた。この中立と民衆による自主防衛路線はさらに、平和主義者として知られる急進自由党（Radikale Venstre）の指導者P・ムンク（Peter Munch, 1870-1948）によって、日本国憲法にも通じるような非軍事中立路線に練り上げられる。ムンクは国が他国に占領され、国家機能が停止しても、国民的結束が維持できれば、祖国は必ず復興すると表明していた（Korsgaard 2006）。この中立平和主義がコックによって継承され、一九四〇年のコペンハーゲン大学でのグルントヴィ連続講義となったのである。とはいえ、本節では以下で政治家グルントヴィではなく、むしろ彼の政治哲学の核心を解明することにしたい。

さて、一八世紀から一九世紀初期のヨーロッパで、人間の理性を原理とする啓蒙思想が頂点を迎えると、身分社会から自由で平等な市民社会への転換が力強く推進され、社会契約思想とその具体化としての国家や社会の創出が試みられるようになる。なるほどグルントヴィは生涯の大部分を独自な観点からの絶対王政の支持派として生きたが、しかし、王政から代表制議会主義へ、身分制社会から市民社会への転換を歴史の必然と解するようになり、フランス革命の錯誤と混乱を厳しく批判しながら、デンマークにおける成功裡の政体移行を模索するようになった。そのさい彼はすでにふれた「共通の最善」を理念として高く掲げており、注目を要する。この理念はアリストテレスの概念を借りれば「賢慮（フロネーシス）」、すなわち他の仕方ではありえない認識の真理（エピステーメー）とは異なり、他の仕方でもありうるが、しかし最善である実践的真理を照らし出すものであった。それゆえこの知はアプリオリにではなく、むしろアポステリオリに歴史経験を踏まえ

て与えられる。「共通の最善」は諸々の既成の知を権力や暴力によってではなくロゴスによって、つまり対話や討議、ルールに基づく紛争などの言語的相互行為を通じて変容させて導くことから得られるが、グルントヴィの時代の脈絡にあっては、「上から」の啓蒙的統治を担う官僚層によって「最善」が「合理的」に解釈されるだろうし、他方で、議会を占める多数派によって解釈が決定される方向も想定されるだろう。これにたいしてグルントヴィのアプローチは啓蒙絶対主義か、議会主義かという選択の狭間で独自の観点から与えられる。それが「デンマークの四葉のクローヴァー」などでも論じられる「国王の自由」と自由な「民衆の声」とを結合する政体観であり、いわゆる「世論統治型絶対王政」(den opinionstyrede enevælde)である(Birkelund 2008; グルントヴィ 2014; Damsholt 2015)。

すなわち、グルントヴィは「国王の自由」と「民衆の声」との結合が最善の自由を創出すると考え、この理念へと通じる一六六〇年のデンマーク絶対王政の成立さえ、ある種の「革命」とみなした。すなわち彼は、フランス絶対王政の場合、国王と貴族、聖職者の特権的階級からなる権力ブロックが「九六パーセント」を占めるブルジョワ・民衆ブロックを抑圧し支配すると解する。これにたいしてデンマークの絶対王政の成立は、「危険な賭け」ではあったが、国王や聖職者がブルジョワ・ブロックと連携して広大な土地を所有する地方貴族の専横支配を制度的に抑止し、国内外の難問解決に大きな一歩を踏み出したとするのである(Grundtvig 1877; グルントヴィ 20014/15)。

こうした歴史把握の妥当性について私はにわかに判断できないが、歴史家の議論も後者の絶対王政が「統治の法」(Lex Regia)に基づき、かなりの程度公正で腐敗度の低い合理的システムだとしており、グルントヴィの理解と帰を一にするものがある(Knudsen 1993)。本書でもいわれるように、デンマークの政体にはヴァイキング時代の「偉大なる『シング』(ting)」、すなわち法とリーダーによる一元的統治と民衆の自由との結合の伝統があり、その政治文化は大枠では今日においても失われておらず、一元的な政治中枢と多様な協議回路の連結、あるいは法治国家の単一性と高度にリベラルな市民社会の結合に具体化されている。だが問題は一方で国家の単一の統治を、他方で民衆の自由な声の国家統治への反映をそれぞれ保障し、賢慮としての「共通の最善」をどのように導くことができるかである。

この点でグルントヴィは国家体制にかんして絶対王政擁護の心情をもち続けたが、他方で代表制議会の多数派を通じたブルジョワの特殊利害追求には賛同できなかった。彼の政体観からすると「共通の最善」の導出の成否は、一八三〇年代の身分制地方諮問議会の設立によって「民衆の声」が良好に機能するようになること、そのことで国家権力と民衆との相互作用が推進されることに依存していた。そのさい問題は「民衆の声」の成長であり、とりわけ「庶民」すなわち小農層が政治主体として覚醒して「市民」あるいは「国民」となり、議会でも教養層や官僚、地主に伍して自らの価値観や利害関心を表明し、討議によって「共通の最善」を導出できること、さらには官僚層、教養層が民衆的感覚を理解し、民衆的「国民」の一部となることは決定的であった。ソーアの「フォルケリ・ホイスコーレ」はその意味で、一方で教養層の陶冶形成、そして基本的には「庶民」の民衆的「国民」への陶冶形成の制度であり、法と世論に基づき、かつ政治中枢をもつ政体を現実に機能させる前提だったのである。

補足として、ここでグルントヴィが「国民」の観念を「ネイション」や「ナショナル」という用語法によってではなく、「フォルク」や「フォルケリ」、「フォルリヘズ」等と表現したことについてふれておきたい(六)。いうまでもなく「ネイション」はフランス革命以来「国民」を表す概念であるが、一九世紀のデンマークにあってこの用語はドイツ的教養を背景とし、一八四九年の自由主義憲法を領導した教

養市民層によって掲げられた。彼ら自身が自らを「国民自由主義」(Nationalliberalisme)と称したのであるが、この党派的ネットワークは大学でラテン語やドイツ語を通じて学問(ヴィッセンシャフト)を習得した選良のサークルとして、あくまで未熟な「庶民」の代弁者たろうとした。たとえば、国民自由主義の主要リーダーであったO・レーマン(Orla Lehmann, 1810-1870)は、絶対王政から議会制への体制転換を国王からデンマークの選良層への権力移管と理解し、「蒙昧な一般庶民の手に国家統治を委ねたのではない」(Korsgaard, 2012, s.55)と公言していた。こうした言説において「民衆のための統治」は主張されるが、「民衆による統治」は不在である。これにたいして、グルントヴィの民衆的「国民(フォルク)」あるいは「国民性(フォルケリヘズ)」(Folkelighed)の観念は、繰り返し述べるように身分社会の一構成層である「庶民」が自分自身を精算して、自由かつ平等な仕方で結束する「国民(フォルク)」として自覚することを基本とする。この意味での「国民」は選良である教養市民層に代表されず、農民層自身を中心として「下から」、ボトムから立ち上げられた自由で平等な能動的主体である。この主体の立ち上げにさいして「フォルケリ・ホイスコーレ」の決定的役割が想定されていたのである。じっさいの歴史の経緯からするとグルントヴィのソーアの構想は挫折するものの、とくに一九世紀の後半の対独戦争敗北後に、小さな民間のフォルケホイスコーレがグルントヴィ派の人々の努力で叢生し、理念は独自の仕方で継承される。そのことに並行して台頭した政党「左派」自由党(Venstre)は指導者を含む多くのメンバーがホイスコーレ出身者であったし、二〇世紀の「体制転換」後に首相になったJ・C・クリステンセン(Jens Christian Christensen, 1856-1930)はマリエリュスト・ホイスコーレ(グルントヴィのホイスコーレ)の学生でさえあったのである。

四　「社会(サムフンズ)」の形成

さて、本節で私は「社会(サムフンズ)」形成にかかわって三点に敷衍しよう。なお、この場合の「社会(サムフンズ)」は、たんに精神的結合だけでなく、物質的関係をも含意するものとする。要点を先取りしていえば、グルントヴィは知的・政治的改革者として生きたが、その哲学はその後、自由、平等、友愛を高度に体現するデンマーク「社会(サムフンズ)」の独特な過程をつくりあげ、福祉国家のあり方にも多大な影響を及ぼしたのである。

まず第一点に市場経済モデルにかんしてであるが、私たちに周知であるのは、グルントヴィ派のフォルケホイスコーレが農業経済の革新というべき協同組合運動の担い手を輩出し、すでに百年前の日本にも影響を与えたことである。すなわち、一九世紀のデンマークにおいてイギリスやヨーロッパへの穀物輸出が重要産業となっていたが、蒸気船や鉄道の発達により新大陸からの安価な穀物輸送が可能になると、デンマーク農業は大きな困難に遭遇した。農民たちはそこで生産と輸出の主力を酪農製品に転換し、しかもそれを協同組合型経営に担わせ、銀行や保険業なども独自に創出することによってデンマーク農業を復活させた。そこに豊かな農業国デンマークの伝説的物語が生まれたのである(ダム 2014; Bhattachary 2011)。ちなみにこれらの協同組合は国家から独立した私的経済単位でありながら、同時にそこに民主主義的政治運営が貫かれた。たとえば、それぞれの家産経営の規模や家畜の保有数にかかわらず一人一票の政治的平等が貫かれたことなどは特筆すべきである。ここには、国家による経済への介入の契機が含まれるわけではないが、しかし市場を自律的、政治的に自己調整する市民社会、あえていえばデンマーク型市場経済モデルの原型が確認できるのである。

第二点目に、グルントヴィと福祉国家形成の関係にふれたい。私には必ずしもこの関係が積極

的なものとして議論されているようには思えないが、日本の文献ではグルントヴィが二〇世紀の福祉国家を導いた思想家と紹介される事例もあり問題は錯綜している（アナセン 1999）。じっさい、グルントヴィ自身はとくにナポレオン戦争後の経済破綻を受けて、知的な意味での公的保障を除いて必ずしも公的福祉制度を支持しておらず、むしろ福祉の仕事を主に家族や共同体の課題として伝統的な仕方で理解している（Philip 1947; Korsgaard 2014）。また経済政策にかんしては、アダム・スミスのように市場の自由と「共通の最善」との調和にたいするオプティミズムに立脚しているともされる（Vind 2015）。たしかに彼は一九世紀の前半期に四度イングランドに渡航し、「鉄の手袋をして自由を獲得する」機械制大工業と議会主義的喧騒に驚嘆し、そこに古北欧の闘争精神を再発見した（グルントヴィ 2014； コック 2007）。だが彼がプロレタリアートの大量出現とそれに伴う深刻な社会問題の本質を理解していたとは思えない(Tjørnehøj 2004)。なるほど彼は機械制大工業が人間を無思慮にし、機械の奴隷に貶めること、職人的な技能を駆逐すること、イングランドの救貧法がきわめて非人間的な仕方で施行されていることなど、いわゆる人間疎外を告発する（Grundtvig 1877； グルントヴィ 2014）。だが、そのことにかかわる問題解決が論じられているわけではない。グルントヴィのテクストは、彼が生の哲学者であり、社会的自由主義者であることを証言するが、しかし、彼自身の思索のなかには社会問題の出現以前の自由主義ユートピアが歴史的制約として残存している。それゆえに彼が、本書にもうかがわれるように宗教の自由や出版の自由のために論陣を張った改革者であったとしても（Birkelund 2008; Korsgaard 2011）、彼の歴史的制約を看過し、福祉制度にかかわって彼のことばや事績を過大に評価することはできない相談である。

だがそれにもかかわらず、私はグルントヴィを非社会的な思想家、あるいは反福祉国家の思想家に数え上げるつもりはない。じっさい、有名な彼の平等主義テーゼは産業化以後に噴出する社会問題の解決の指針となり、大規模な資源再配置を実施する北欧型の普遍主義的福祉国家構築に導きの糸を提供し、今日においても多くの継承者を獲得しているからである。私自身もこのテーゼを幾度か読者に紹介したことがあるが（小池 2005b, 2011； 小池・西 2007）、それは格差型社会に変貌した現代日本のなかでインパクトは強く、反応も大きいのである。

過剰な財産所有者がほとんどおらず
過少な所有者はなおさらいない
そのとき我等は豊かさを得ているのだ
（「はるかに聳える山々」一八二〇年）

公的社会保障にかかわっていえば、私は一九世紀にデンマーク国教会のシェラン島監督を務めたH・L・マーテンセン（Hans Lassen Martensen, 1808-84）の社会思想に言及する必要性を感じる。彼は資本主義的産業化のもたらす社会問題と正面から対峙し、自由主義と空想および革命的社会主義との両イデオロギーへの批判を媒介として、キリスト教の精神と結びつく「倫理的社会主義」（Etisk Socialisme）を提起する。そのさい彼はスミスやマルサスを厳しく批判し、マルクスやエンゲルスを肯定的に引用し、パリ・コンミューンの問題提起を留保つきながら承認し、私的福祉とともに公的福祉制度の重要な役割を提起する。それは、二〇世紀福祉国家の先駆的構想とも思える議論であり、驚くことに、そこにはすでに今日「フレキシキュリティ」といわれる積極的労働市場政策の発想さえも含まれ、私には古びたところがほとんど感じられない（マーテンセン

2012)。そのマーテンセンはおそらくグルントヴィから薫陶を受けたのであろう、先に示した平等主義テーゼを彼の立論の出発点にすえている。つまり彼はグルントヴィと社会主義、エリート的視点と民衆的視点との相互作用の交点に立つともいえるのである。

このことにくわえて、デンマーク社会主義へのグルントヴィ哲学の浸透も問いうる。前者は一九世紀にL・ピオ(Louis Pio, 1841-94)らがマルクス、エンゲルスらの指導する第一インターナショナルの支部として活動を開始し、当初は革命路線を採用して激しい階級闘争を展開していた。だが、とくに二〇世紀以降、一方で第一次世界大戦における中立政策を保持するとともに、他方で階級闘争を議会主義改革路線に結びつけ、さらに一九三三年に著名な首相であったTh・スタウニン(Thorvald Stauning, 1873-1942)による自由主義者や農民との歴史的妥協、いわゆる「カンスラーガーゼ合意」(Kanslergadeforliget)を導き、社会相K・K・スタインケ(Karl Kristian Steincke,1880–1963)のイニシアティヴによる総合的な社会福祉立法を実現する。一九三四年には社会主義はナショナルな共同理念を積極的に摂取し、「国民のためのデンマーク」(Danmark for Folket)綱領を採択するのである(Christiansen 1978)。

これらのことは世界恐慌の危機のなかで、名実ともにデンマーク社会主義が労働者の党派であると同時に、「国民」的党派であることを宣言し、民衆的「国民」(フォルケリヘズ)の観念と民主主義、社会主義の三要素を統合したことを意味する。この経緯の知的背景にかかわり、私たちは労働者の教育組織の創設やグルントヴィ派のフォルケホイスコーレの経験を模倣した労働者ホイスコーレの設立など、グルントヴィおよびグルントヴィ主義の影響を見て取ることができる。そのことがひいては、危機の時代においてスターリニズムやナチズムの全体主義イデオロギーの労働者への浸透を回避しえた主要因だったのである(コースゴー 1999; Korsgaard 2015)。

第三に、私は現代デンマークを理解する上で重要な「協議経済」理論について紹介しておきたい。すでに述べたように、グルントヴィのデンマークへの貢献が「共通の最善」に基づく国民形成であるにしても、それはいわゆる上部構造にかかわる共同であった。だが二〇世紀以後の歴史は、彼の哲学がたんに農村協同組合に具体化されただけではなく、広く社会経済のなかに実質化されることを物語る。それは哲学の土台における実現であり、そのベクトルはマルクスの唯物史観の説明とはちょうど逆になっている。つまり近代デンマークには、グルントヴィ的な理念が物質的諸関係へと進展する運動と、マルクス的な物質的土台の変革に立って上部構造を再構築する運動との相異なる二方向の運動の相互作用があることを確認できる。その最初の交点として、両運動がきわめて意義深い仕方で制度化されたのが一八九九年の労資による基本合意、いわゆる「九月合意」(Septemberforliget)である。私はそこに独自のデンマーク型「社会(サムフンズ)」(Samfund)が誕生したと理解したいと思う。

この「九月合意」は労働市場において相争う労資が相互の諸権利を承認し、同じ有機体の構成諸要素として、しかも対等平等な諸要素として、ある場合は国家にたいして自律的に、ある場合は国家を交えて三者で賃金や労働条件、紛争など労働市場をめぐる諸問題を協議・決定するデンマーク型ネオコーポラティズムの礎石をすえるものであった(七)。それは後に世界恐慌と第二次大戦を経ていっそう拡張され、経済的「共同秩序」(samordning)、すなわち経済的有機体としてのデンマークの観念を生み、パートナー間の紛争を介しながらも討議、情報交換、相互学習、国民経済運営の諸手段を鍛えあげ、主題においてもアクターにおいても労働市場の範囲内に限定されず、財政や経済政策、環境政策、テクノロジー開発などにも議論を拡張しながら今日においても生きている。このように国家から相対的に自律的な仕方で、デンマークの社会経済は市場経

済、混合経済とともに特定の諸問題にかかわって「協議経済」(Forhandlingsøkonomi/negotiated economy)を不可欠の調整手段として組み入れるようになったのであり、そのさい協議参加者は、自身の特殊な権利や利益に配慮するとともに、同一の船の乗組員のように社会的経済の課題解釈と運営、また開発に水平的に共同責任を負う義務も承認しているのである(Pedersen 1993, 2011; Pedersen et al. 1994)。

こうしてデンマーク「社会(サムフンズ)」はたんに、諸個人の契約関係だけでは説明できず、国家と市民社会の二分法によってはとらえられない有機的性格を獲得している。この「社会(サムフンズ)」はたしかに制度的にはすでに述べた一九世紀末の労資の「九月合意」に遡るが、その理念的起源に遡れば、あるいはたんに物的資源の再配置でなく、知的資源や学習・開発機能に着目すれば、さらにおよそ五〇年を遡り、グルントヴィ哲学とホイスコーレ構想にいたることは明らかだろう。要するに、グルントヴィの理念は一九世紀末の労資の基本合意において経済を構造化して「社会(サムフンズ)」あるいは「社会経済」(samfundsøkonomi)を形成し、さらに今日、学習や知識・情報化を骨格に組み込む「社会(サムフンズ)」へと進化していると解することができるのである(八)。

しかしながら、私たちは今日いくつかの問題が顕在化していることも知っている。それは、この「社会(サムフンズ)」が物質的な関係を含むことで「国家」や「国民」を越えて拡張された結果であり、一九世紀の国民国家の形成期とは基本的に異なる段階に至っていることである。たしかにデンマークも古くから国外に開かれた経済を保持していたが、今日ではEU加盟をはじめとしたトランスナショナルな関係、およびグローバルな関係をいっそう広範囲に、いっそう密接に取り結んでいる。かつてのようにエスニックな等質性を前提する「国民」も「社会(サムフンズ)」ももはや前提できない。じっさい、現在では非デンマーク文化を背景とする市民の割合は全住民のおよそ一〇パーセントを数えるようになり、そこに生まれるコンフリクトや社会問題は、一九世紀型、二〇世紀型の国民的「社会(サムフンズ)」に挑戦している。遺憾ながらこの現状にかんして、今私は多くを語ることができないが、その脈絡から一方でグルントヴィの「デンマーク的性格」(Danskhed)の言説が文化的排外主義的に利用され、等質的エスニシティーを頑なに保護する盾として働くことにもなるし、他方では、そうした「ナショナリスト、グルントヴィ」にたいする批判も表明されることになる(Larsen 2015)。このことはグルントヴィの理念にとって不幸であり、最大の試練になると思われる。

とはいえ私は、ある種「模範国」ともいえるデンマークにおいて、これまで獲得した「良い生活」が、すなわち社会的市民権が保障され、ディースントな経済が安定的に機能することはきわめて重要であると考える。そのためには社会経済の理念やその国民的紐帯、民主的政治文化、高度な福祉国家が継承され、重要な役割を担い続けねばならない。ただし、そのさいの社会紐帯はコックが指摘したように、文化的紐帯以上に政治的なそれが(Koch 1942)、しかも経済に密接に結びついた政治紐帯がいっそう考慮されることは予想できるであろう。つまり、一定の国土に生まれて特定の文化背景を共有する者のみならず、何らかの経緯でそこに住むが多様な文化を背景とする住民もまた「生けることば」による相互行為を営む知的・政治的デンマークを形成し、グローバル化する経済をもそこに係留すること、こうした意味での「デンマーク的性格」が、いっそう人間的な政治・経済として進化する道がグルントヴィの思想枠組からも予想できるし、アクチュアルになるであろう。このことにもかかわるが、彼のテクストがつねにそのような実験精神を参照させることも紹介しておかねばならない。それにしたがえばじつに、人間は「世界の終末まで自己自身の模倣を

運命づけられた猿」ではなく、新たな次元と形態で精神と「塵」とを、すなわち理念と現状とを浸透させ架橋する「神の実験」(guddommeligt Experiment)に他ならないというのである(グルントヴィ 2012)。

おわりに――グルントヴィと私たち

結びとして、デンマークと日本との関係から私の現在の研究関心にふれよう。デンマークは九州ほどの面積で人口もおよそ五五〇万人にすぎないが、それにもかかわらず同国は近年、高度な社会保障制度を保持し、顕著な経済的成功を収め、また「世界一仕合わせな国」の枕詞によって人口に膾炙するようになった。だが、私たちにあっては、「かの国は小国だから」というありふれた理由づけで思考が停止され、それ以上の学術探求に歩み出さない傾向がある。じっさい現日本政府は、この一五〇年の近代化の過程で世界の列強に伍する経済大国となったことを自負し、今後さらに軍事大国を再現しようとしている。だがこの頑なな「大国」願望には階級支配の意思は顕著だが、国民合意の民主主義的な政治、経済への希望は宿らない(渡辺他 2014)。

これにたいして私は、デンマークという国の存在自体が「大国」にたいする疑問符を体現し、またそのパラドクスを照射しているように思える。じつは、このような小国視点からの大国にたいする留保や批判はおよそ一五〇年前の近代化の初発の時点から、日本の良識層のなかに懐胎していたことであった。なるほど、近代日本は最初にプロイセン・ドイツをモデルとした軍事大国化を推進し、第二次大戦での挫折を受けて転身し、次にアメリカ資本主義に範をとって経済大国化に邁進してきた。だが私たちは、両形態の大国化路線がつねに小国、あるいは小国主義との緊張関係を伴い、また後者の抑圧の上に推進されてきたこと、したがって逆にいえば、日本の近代史には小国探求の水脈があるときは伏流として、あるときは本流として脈々と流れ続け、それが陰に陽にグルントヴィやデンマークへの関心とも絡み合っていることは押えておかなければならない。それはたとえば、日本の近代化構想に重要な役割を果たした一八七〇年代前半の岩倉使節団の欧米回覧において、デンマークを含むヨーロッパの小国に熱い視線が注がれた事実に示されるし、この経験を受けた自由民権やその後の大正デモクラシーの思想家、植木枝盛や中江兆民、三浦銕太郎、石橋湛山らによって小国の価値や優位性にはっきりとした表現が与えられてきた。そして第二次大戦後に制定された日本国憲法の平和や民主主義、社会福祉などの諸理念には、これらの小国思想が本流のように流れ込んで結実しているのである(田中 1999)。こうした小国思想が大国路線の破綻ないし行き詰まりにあって、多様な民衆・社会運動、宗教思想、民間ジャーナリズムの活動などを通じて、時々の政治権力を批判し、大国や侵略主義に代替する歴史径路を対置してきたことは推定できる。この小国主義の径路が具体的にどのように展開されたのか、どのような仕方で現在及び将来の日本で具体性を帯びることができるのか。それらの研究に必ずしも十分な蓄積があるとはいえないが、それだけに、訳者には大きな関心の的である。

このこととかかわって、私は「大日本帝国」の体制下にあって小国デンマークの意義を先駆的に論じた内村鑑三の講演「デンマルク国の話」(一九一一年)ついて言及せずにはおれない。この物語は「信仰と樹木とをもって国を救いし話」の副題が付され、一八六四年の対独戦争に敗北し、領土を奪われて小国化したデンマークが、「外にて失いしものを内にて回復すべし」(H. P. Holst, 1811-93)とする祖国再生の国民精神を背景に、ユラン半島の荒蕪地にノルウェー産の樅を植林して豊かな農地を獲得したE・ダルガス(Enrico Mylius Dalgas, 1828-94)らの努力とその教訓を語ったものである(内村 1946)。この講演内容はたしかに歴史家によって伝聞と創作の所産で

あり、史実とは異なる日本的なデンマーク受容の現象と批判されている（百瀬・村井 1996）。この指摘自体は妥当であろうが、それでも私は思想史上において、この講演は普遍的意義を帯びると考える。このことについても詳しく論じる余地はないが、その内村が結論的に要約する三点を改めて紹介し、読者に一考を促すことにしたい。

すなわち内村はデンマークの小国化の教訓を、第一に国の興亡は戦争ではなく、民衆の平素の修養、すなわち啓蒙と陶冶形成に依存すること、第二に天然の自然は無限のエネルギーと生産力を擁していること、第三に、国の力は軍事力や経済力によって測られるのではなく、「信仰」の力に依拠すると主張していることである。第三点目の「信仰」をあえて広い意味で、普遍的視野に立つ「哲学」と考えることにしよう。すると、これらの諸点はいずれも小国主義の基本諸要素に的確な表現を与えていると思えるのである。なるほど内村は「グルントヴィ」の名をあげていない。彼は無教会派であり、そもそもグルントヴィを知らなかった可能性がある。だが、先の三点はいずれもグルントヴィから読み取れる基本思想である。たとえば一点目についていえば、本書の「デンマークへの祝賀」などでグルントヴィは拡張主義や侵略主義を排し、デンマークと同様に他の諸民属の存在の権利も承認し、小国デンマークに満足することを明言している。この意味で、国は一九世紀に「陸の六分の一を占める英国」であるべきではなく、さらに日本がかつての帝国ドイツから学んだような侵略的軍国主義であってはならなかった。第二次大戦後の脈絡でいえば、旧ソヴィエト型国家社会主義でも、アメリカ型新自由主義でもあってはならない。むしろ内村はデンマークに、多種多様な大国覇権主義を克服しうる小国型発展モデルを直観していたのである。

二点目に、デンマークはチェルノブイリ原発事故以前の一九八五年に議会で原子力発電不採用の決断を行い、周知のように再生可能エネルギーの開発に国をあげて力を注いできた。じつに風力発電にかんしては、すでに一九世紀にユラン半島のアスコウ・フォルケホイスコーレでP・ラクール（Poul la Cour, 1864-1908）らによって先駆的に開発の実験が開始されており、およそ百年後に大規模な実用化に成功したのである。私はこの発想転換とブリコラージュ風の開発にかかわって「陽光」や「手」、「口」といった思想要素に着目し、グルントヴィの「生の啓蒙」が近代科学の解毒装置の役割を果たしたと指摘したことがある（小池 2012）。

最後に、「哲学」としてはすでに長々と述べてきたので、ここではグルントヴィ哲学が小国型国民国家形成を支え、さらに社会経済や社会保障制度、先駆的自然エネルギー開発など現代的な社会的ヒューマニズムを具体化することによって、その人類史的意義が認知されはじめていると再確認することでよしとしよう。このようにグルントヴィ哲学は、一方で独自の知的・政治的文化と社会制度とによって一国の安定的な生活保持へ経路を照らし出したし、他方で遅ればせであるが、その普遍的な「人間性」（Menneskelighed）への貢献が評価されつつある。「デンマルク国」とはこのような質をもつ小国哲学の結晶、作品と考えることができるのである。

注

（一）二〇〇〇年代のデンマークにあって活発にグルントヴィに言及する政治家たちがかなりの数にのぼる。ただしそのなかにはグルントヴィをデンマーク的性格とキリスト教とを擁護する頑ななナショナリストの代表に仕立てて非デンマーク文化や非キリスト教徒と対置し、排除する立場も含まれている（Larsen 2005）。たしかに、一九世紀人であり、国民国家の思想家であるグルントヴィに顕著なナショナリズムの主張が見られることは事実であり、彼の歴史的制約である。だが

同時に彼は排外的ではなく、エスニックなものを越えたヒューマニティーの価値や他文化、他宗教の諸権利を承認しており、文化的背景を異にする者にも教訓となる様々な思索を展開している。それゆえ、私のような非デンマーク文化圏にある者にとって、排外的「グルントヴィ」からは何ら示唆を受けるところがない。それは逆にグルントヴィを貶下し、彼の思想の人類的価値を看過するように思える。

（二）近代思想といっても、私の研究の制約上大陸ヨーロッパの思想史との関連で若干論じているにすぎない。だが、グルントヴィの思想史的理解には一方で歴史哲学にかかわるJ・Gヘルダーの影響が跡づけられねばならないし、他方でA・スミスやファーガソンらスコットランド啓蒙や、ベンサム、ミルらの功利主義との比較対照が必要である（Vind 2015）。今後の研検討課題としたい。

（三）「ホイスコーレ」(højskole)や「フォルケホイスコーレ」（folkehøjskole）が今日一般的な用語法である。かつてドイツ文化から多大な影響を被ったデンマークでは、「ホイスコーレ」は元来「大学」を意味していた。だがグルントヴィは、このことばを言語的に限定して「デンマーク語ホイスコーレ」、「ノルウェー語ホイスコーレ」等とし、その一般的名称として「フォルケリ・ホイスコーレ」（folkelig Højskole）を用いている。これはソーアのアカデミーで構想された母語に基づく学芸の場を意味し、そこに庶民であれエリートであれ、誰もが同じ「国民」、すなわち民属・民衆の一員として訪問できるかなり大規模な国立施設が想定されていた。なお、「北欧の学問的連携」（『ホイスコーレ＜上＞』）のテクストに見られるように、グルントヴィは他方でスウェーデンのヨーテボリに北欧共通の大学を創設するプランを提起している。これは「学問的ホイスコーレ」（videnskabelig Højskole）とされるが、通常私たちが「大学」と呼ぶ機関に対応する。こうした用語法を手がかりにすると、グルントヴィのオリジナルなホイスコーレ構想、とくに「フォルケリ・ホイスコーレ」の独自性が浮かび上がる。なお、グルントヴィのテクストには「フォルケホイスコーレ」という表現はない。この用語法の起源は歴史家のR・スコーマンによれば一八四四年にCh・フローらによって南ユランに初めて開校されたレディン・フォルケホイスコーレに求められるという（Skovmand 1944, 1983）。グルントヴィのソーアの構想は挫折したが、彼の理念は多数にのぼる小規模な私立学校「フォルケホイスコーレ」を通じて具体化され、継承されてきたことになる。

（四）この概念は周知のように、アドルノ、ホルクハイマーの著作によって人口に膾炙することになったが、その事態そのものは近代の理想を現実に移したフランス革命の偉大さと、それが陥ったテロリズムの狂乱に象徴的に現れており、たとえばヘーゲル哲学はこのことをはっきりと洞察していた。同様のことは、ワーマール共和国のナチス・ドイツへの退行、ロシア革命のスターリン独裁への反転等々、これまでの歴史過程で多様な仕方で現出している。グルントヴィもまた、ヘーゲルのようにフランス革命とその反転を「啓蒙の弁証法」と類似した仕方で理解することで自らの社会・政治哲学を鍛え上げた（Grundtvig 1877; Birkelund 2001a）。すなわち、留保つき改革主義である（Hall et al. 2015）。この点を詳しく論じないが、いずれにしても「生の啓蒙」が「浅薄な啓蒙」に対比して「いっそう根底的な啓蒙」だという論点がここにかかわっている。なお、グルントヴィの思想系譜についてドイツ哲学の影響とともにイギリス哲学のそれが議論されるが、この点についても訳者の研究はほとんど進んでいない。今後の課題としたい。

（五）ここで「常識」はより正確に表現すればつねに常識過程である。私はこのことを治安維持法によって獄死させられ唯物論哲学者戸坂潤（1900-45）から学んだのだが、彼は常識（コモン・セ

ンス）の自己向上機能を「常識水準」としたんなる「常識」と概念的に区別することで解明していた。この区別は、戸坂が常識分析を没政治的生活世界の分析にとどめず、社会的、政治的、歴史的な過程と結合させている理由である。私はこの点もグルントヴィの常識理解に通底していると考える（戸坂 1977; 小池 2009）。

（六）「フォルク」、「フォルケリ」、「フォルケリヘズ」にうまく対応する日本語を探すことはたしかに難しい。適切な訳語になるまでしばらく研究と議論が必要であろう。ただ私の意図としては「民衆」の語によってボトムから形成される国民の意味を込め、「民属」の表現によって一定のエトノスよりも、むしろ居住地への帰属性にアクセントをおいた。つまり、グルントヴィにおいてはまだ両義的と思えるのだが、「民属」が文化概念である以上に、居住地区住民の意味での「デーモス」（dēmos）という政治的概念であることを表現したかったからであり、この意味で私は、民衆の共同を伝統文化ではなく政治的なものとするハル・コックの主張にしたがった（Koch 1942, コック 2004）。

（七）社会的パートナーの規定は、ここで述べた一八九九年の「九月合意」によって労資及び国家の三者によってスタートする。ここで国民的経済共同体、いわゆる労資協調体制が成立するが、それはあくまでナショナルなレヴェルの、しかもコンフリクトを含む共同関係であって、企業別に組織されて成立する労資癒着体制ではない。このような質の共同が北欧型の普遍主義的社会保障を構築したのであり、逆に企業別協調はビスマルク型社会保険制度などを可能にするかもしれない。とくに日本の例から私たちは、企業別協調は労働者の企業への過剰な忠誠と企業間競争の激化、労働者の分断と競争の拡大、労働条件や生活の格差の創出につながるデメリットを見ておかねばならない。

（八）私はこうした社会のあり方について、とくに、今日いわれる知識社会、情報社会とされる社会の進化について、さらに掘り下げが必要であるがここではふれることができない。なお、日本では今日でも社会を類型化するさいに、テニエースのいう「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」、すなわち地縁、血縁、親族などとして結合する共同組織と、契約関係によって結合する機能組織とがしばしば対照される。しかし、ここにいわれる「社会（サムフンズ）」は、共同組織と機能組織、社会と国家とを截然と区別する自由主義的二分法でとらえられない独自の社会類型である。この点についても、今後の探求課題としておきたい。

欧文参考文献：

AFHD [The Association of Folk High Schools in Denmark] (2012), *The Danish "Folkehøjskole"*.

Bhattachary, A. (2011), *Education for the People: Concepts of Grundtvig, Tagore, Gandhi and Freire*, Sense Publishers.

Birkelund, R.（2000）, Grundvigs syn på videnskab og uddannelse af praktiske embedsmænd, i: *Nordisk Pedagogik*, Vol. 20, Nr.2.

—— （2001a）, Grundtvig og Demokratiet: Om oplysning, dannelse og demokrati i: O. Korsgaard(red.), *Poetisk demokrati: Om personlig dannelse og samfundsdannelse*, Gads Forlag.

—— （2001b）, Knud Ejler Løgstrup: Sansning, samfund og sundhed, i: R. Birkelund

(red.), *Eksistens og Livsfilosofi*, Gyldendal.
—— (2008), *Frihed til Fælles Bedste: En Oppositionel Stemme fra Fortiden. Om Grundtvigs Frihedsbegreb*, Århus Universitetsforlag.
Christiansen, N. F. (1978), Reformism within Danish Social Democracy, until Nineteen Thirties, in: *Scandinavian Journal of History* 3.
Damsholt, T. (2015), "Hand of King and Voice of People": Grundtvig on Democracy and Responsibility of the Self, in: Hall, J. A., O. Korsgaard and O. K. Pedersen (red.), *Building the Nation: N. F. S. Grundtvig and Danish National Identity,* McGill-Qeen's University Press.
Grundtvig, N. F. S. (1877), *Mands Minde 1788-1838: Foredrag over det sidste halve Aarhundredes Historie*, Holdete 1838, Karl Schoenbergs Forlag.
—— (1905), Om Videnskabeligheds Forhold til Erfahring og sund Menneske Forstand, i: H. Betrup (red.), *N. F. S. Grundtvigs Udvalgte Skrifter*, Bd.3.
Hall, J. A., O. Korsgaard and O. K. Pedersen (red.), (2015), *Building the Nation: N. F. S. Grundtvig and Danish National Identity,* McGillQeen's University Press.
Knudsen, T. (1993), *Dansk stat i Europa*, Jurist- og Økonomforbundets Forlag.
—— (2000), Tilbliversen af den universalistiske velfærdsstat, i: T. Knudsen (red.), i: *Den nordiske protestantisme og velfærdsstaten,* Aarhus Universtetsforlag.
Koch, H. (1942), *Dagen og Vejen,* Westermann.
Korsgaard, O. (2004), *Kampen om Folket*, Gydendal.
—— (2006), The Danish Way to Establish the Nation in the Hearts of People, in: Campbell, J. L., J.A. Hall and O. K. Pedersen (ed.) (2006), *National Identity and Varieties of Capitalism: The Danish Experience,* McGill-Queen's University Press.
—— (2011), Grundtvig's Philosophy of Enlightenment and Education, in: Broad-bridge et al. (ed.), *The School for Life: N. F. S. Grundtvig,* Aarhus University Press.
—— (2012), *N. F. S. Grundtvig.* Jurist- og Økonomforbundets Forlag（English version: *N.F.S. Grundtvig: As a Political Thinker*, Djøf Publishing, 2014）.
—— (2015), Grundtvig's Idea of a People's High School and Its Historical Influence, in: *Building the Nation: N. F. S. Grundtvig and Danish National Identity*.
Larsen, E. L. (2015), An Ongoing Influence: The Political Application of Grundtvig's Ideas in the Debate on Danish Society, 2001-09, in: *Building the Nation: N. F. S. Grundtvig and Danish National Identity*.
Pedersen, O. K. (1993), The Institutional History of Danish Polity: From Mixed Economy to a Negotiated Economy, in: Sv-E. Sjøstrand (ed.), *Institutional Change: Theories and Empirical Findings,* M.E. Shape.
—— （2010）, Grundvig som Samfundsbygger, til: Fordrag holdt 24.1.2010 på Vartov i forbindelse med konference, "*Grundtvig som Samfundsbygger*".
—— （2011）, *Konkkurencestaten,* Hans Reizels Forlag.
Pedersen, O. K. et al.（1994）, *Demokratiets lette Tilstand,* Spektrum.
Philip, K. (1947), *Staten og Fattigdommen*, Gjellerup Forlag.

Scharling, C. I. (1947), *Grundtvig og Romantiken*, Gyldendal.
Skovmand, R. (1944), *Folkehøjskolen i Danmark 1841-1892*, Det danske Forlag.
—— (1983), Grundtvig and the Folk high school Movement, in: *N. F. S. Grundtvig; Tradition and Renewal,* Det danske Selskeb.
Tjørnehøj, H. (2004), Den ufolkelige Grundtvig, i: *Kristelig Bladet*, 13. februar.
Vind, O. (2015), Grundtvig and English Liberalism, in: *Building the Nation: N. F. S. Grundtvig and Danish National Identity*.

和文参考文献:

アナセン、R. B. (1999)「デンマーク社会福祉の道」(平林孝裕訳、橋本淳編『デンマークの歴史』創元社)。
内村鑑三(1946)『後世への最大遺物、デンマルク国の話』(岩波文庫)。
江口千春編著(2010)『デンマークの教育に学ぶ』(かもがわ出版)。
大熊由紀子(1991)『「寝たきり老人」のいる国いない国』(ぶどう社)。
岡田洋司(1992)『ある農村振興の奇跡——日本デンマークに生きた人々』(農山漁村文化協会)。
熊野聰(1984)『北の農民ヴァイキング』(平凡社)。
グルントヴィ、N. F. S.(2010)『世界における人間』(小池直人訳、風媒社)。
—— (2012)『生の啓蒙』(小池直人訳、風媒社)。
—— (2014)『ホイスコーレ(上)』(小池直人訳、風媒社)。
—— (2015) 『ホイスコーレ(下)』(小池直人訳、風媒社)。
小池直人(2005a)『デンマークを探る<改訂版>』(風媒社)。
—— (2005b)「生活形式の思想史——デンマーク社会研究への序論」(竹内章郎他『平等主義が福祉をすくう』青木書店)。
—— (2007)「コックのグルントヴィ論——訳者解題」(コック『グルントヴィ』風媒社)。
—— (2009)「生の啓蒙と常識過程——グルントヴィ『哲学・学芸』の基本的性格」(名古屋大学社会文化形成研究会『社会文化形成』別冊1)。
—— (2010)「訳者解題」(グルントヴィ『世界における人間』風媒社)。
—— (2011)「環境保全型福祉国家と<農>の基礎経験——グルントヴィ哲学の射程」(尾関周二他編『<農>と共生の思想』農林統計出版)。
—— (2012)「デンマークの脱原発合意とその条件」(若尾祐司他編『反核から脱原発へ——ヨーロッパ諸国の選択』昭和堂)。
—— (2015)「デンマーク福祉国家とボランタリー社会活動——その現状と関係史」(名古屋哲学研究会編『哲学と現代』第三〇号)。
小池直人/西英子(2007)『福祉国家デンマークのまちづくり』(かもがわ出版)。
コースゴー、O. (1999)『光を求めて』(川崎一彦監訳、高倉尚子訳、東海大学出版会)。
コースゴー、O. /清水満他編著(1993)『デンマークが生んだフォルケホイスコーレの世界』(新評論)。
コック、H. (2004)『生活形式の民主主義——デンマーク社会の哲学』(小池直人訳、花伝社)。
—— (2007)『グルントヴィ』(小池直人訳、風媒社)。

田中彰（1999）『小国主義』（岩波新書）。
戸坂潤（1977）『日本イデオロギー論』（岩波文庫）。
ダム、P.（2014）『グルントヴィ小伝――時代と思想』（小池直人訳、名古屋大学社会文化形成研究会、社会文化形成ディスカッション・ペーパー、No.14-1）。
マーテンセン、H. L.（2012）『倫理的社会主義』（小池直人訳、社会文化形成ディスカッション・ペーパー、No.12-1）。
百瀬宏・村井誠人（1996）『北欧』（新潮社）。
渡辺治他（2014）『＜大国＞への執念』（大月書店）。